

## 4 ある程度漢字を覚えたら……こんな楽しい遊び方がある

次には名詞、形容詞、動詞といった文法上の分類に沿った遊び方、進め方などに全くとらわれずに遊んでみましょう。ただし、読める漢字の数が一定数に届いていないと、少しむずかしいとされますので、あまり無理をしないでください。子どもにとって、わからない漢字ばかりが出てきますと、“強いられた学習”になってしまい、“遊び”の要素が薄められて苦痛に感じられてしまうからです。そこのところをよく判断してから始めてみましょう。

## へん(偏)とつくり(旁)で漢字づくり

漢字を構成する要素である「へん」(字の左側にある部分)と「つくり」(右側)とを組み合わせて字をつくってみる遊びです。とくに魚へんや木へんは文字数も多く、子どもになじみの深いものがたくさんありますから、それらを使ってみましょう。紙に漢字を書き、あらかじめ読めるかどうかを再確認しておいて、それをへんとつくりで切って分けておきます。

(例) 魚の名前づくり

鯉(こい) 魚と里

鯛(たい) 魚と周

鯖(さば) 魚と青

鯛(いわし) 魚と弱

鮭(さけ) 魚と圭

(例) いろいろな木

杉 木と三

桜 木と艹

梅 木と每

挑 木と兆

楓 木と風

これらのカードを、へんとつくりで、それぞれ左右に分けておいておきます。「“こい”の字はこれとこれで作られるのよ」と初めはお母さんがお手本を示してみましょ。それから、「では“すぎ”の字をつくってみようね」とつくらせてみます。ジャンケンで勝った方がつくとか、変化をつけて楽しんでみましょう。

木へん、魚へんに限らず、しんにゆう(?), にんべん(イ)、さんずい

(?)、草かんむり(こ)など、漢字を構成する共通の部首にはこと欠きません。どんどん試してみましょ。 (本巻5「漢字は生きている」に詳しく解説してあります。)

### しりとり漢字

連想ゲームにも似たこの遊びは、簡単な文章のなかに、これまでに読めるようになった漢字をふんだんに取り入れて楽しいもの。でも少しむずかしいかも知れませんが、最初は、お母さんが文章をつかって、それを漢字で示し、一緒に読んで要領を理解させておくとよいでしょう。

(例)

山は高い 高いは富士山 富士山には雪 雪は白い  
 かぜにかかったら病院へ 病院では注射 注射は痛い  
 痛いと涙

### すごろくゲーム

全く無作為に、漢字カードを二十枚くらい選びます。それを順番に並べて最後のカードを“上がり”のカードとしておきます。そしてサイコロを用意し、ふります。出た目の数だけ進んでそのカードを読みあげます。お母さんも一緒に、交互にやってみてください。早く上がった

方が勝ちというわけです。おもしろがるようでしたら、カードの数をドンドン増やしていってみます。読めない漢字が出たら、サッと読んであげ、なるべくゲームのリズムを崩さないで続けましょ。もし、お正月に使ったようなすごろくがあれば、そのひらがなの部分に漢字を貼り付けて使ってもおもしろいでしょう。

### お話づくり

組み合わせると簡単なストーリーになるような漢字カードを何枚か用意し、それを使って短いお話をつくらせてみましょ。よくなじんでいるようなカードを使ってやりますが、たとえ五枚準備し、そのうち二枚しか使えなくても、まったく構いません。慣れてきて、知っている言葉が増えるにしたがって、おのずと多くのカードを“駆使”できるようになります。あせりは禁物です。

(例)

用意するカード 春、花、咲く、草、野原、歩く

春になると花が咲く

草もはえる 野原を歩くとわかります

諺(ことわざ)と俳句はおもしろい

一番最後に諺と俳句を取りあげてみましょ。日本人になじみの深い

数々の句は、大へんリズムカルで覚えやすく、内容も含蓄に富み、ゆかいで楽しいものです。子どもにとっても、それは全く同じことなのです。それと、最後に取りあげたからといって、一番むずかしいのだろうとは絶対に思わないでください。たとえば、東京足立区の梅島幼稚園では、諺、俳句遊びに力を入れています。三歳児でも、何十という数の句を“苦”もなくスラスラと、おもしろがって競うように読んでいるのですから。

ここでは、その梅島幼稚園で子どもたちが楽しんでいるもののうち、調べた結果、とくに覚えやすいとわかったものをあげておきます。日常使っている言葉、あるいは、蟻、蛙、雀、猫、蜂など、身近にいる動物を取りあげた句、それにおもしろい言い回しのものに興味を持ち、喜んでいるようです。以下のような諺、俳句を紙に書いて、子どもの目につくところに貼っておき、ちょっとした機会に、一緒に大きい声で読みあげてみましょう。これまで読んだことのない、あるいは漢字カードにない漢字が出ていても、全然気にすることはありません。子どもは、まるで構わずバリバリと読み始めるでしょう。

(例) 諺

犬も歩けば棒に当たる

鬼の目にも涙

娃の子は蛙

猿も木から落ちる

棚からぼたもち

塵も積もれば山となる

泣き面に蜂

猫に小判

花より団子

目の上のたんこぶ

袋の中の鼠

笑う門に福来たる

親の心子知らず

負けるが勝ち

時は金なり

七転び八起き

(例) 俳句

松尾芭蕉・作

山路来て 何やら床し すみれ草

古池や 蛙飛びこむ 水の音  
面白し 雪にやならん 冬の雨  
ほろほろと 山吹散るか 滝の音  
荒海や 佐波に横たう 天の川  
竹の子や 幼き時の 絵のすさび  
秋深き 隣は何を する人ぞ  
名月や 池をめぐりて 夜もすがら

与謝蕪村・作

春の海 <sup>ひねもす</sup>終日 のたりのたりかな  
静けさに 堪えて水没む たにしかな

小林一茶・作

夕月を 取ってくれろと 泣く子かな  
雪とけて 村いっばいの 子どもかな  
やせ蛙 負けるな一茶 これにあり  
雀の子 そのけそこのけ お馬が通る  
我と来て 遊べや 親のない雀

蟻の道 雲の峰より 続きけん

やれ打つな 蠅が手をすり 足をする

なんとも調子が良く、楽しく覚えられそうですね。ただ、これらの句を最初からまとめて多くを読ませたりはしないように、一日一句をメドにやってみてください。興味を覚え、「もっと、もっと」と子どもから要求が出たら、しめたもの。そうしたら数を増やして読んでみましょう。

俳句は、よく覚えたものなど、上、中、下の句を三枚バラバラのカードにして、組み合わせ遊びをしても大へんおもしろく楽しめます。一枚のカードを見て、残りの二枚をつなぎ合わせて取ったり、全部バラバラにしておいて、上の句からつなぎ合わせてみたり、いろいろにやれます。工夫をして十分に楽しんでください。